



まち・コミュニケーション の これまでと今後を考える



～ 11月3日 まち・コミの集い 報告～

「月刊まち・コミ」2007年8・9月号でご案内した、11月3日と4日の集い。参加申し込み等の関係で、3日の午後のみ、5時間に亘って行いました。

代表の宮定からは、まち・コミ12年間の振り返りのプレゼンテーションを行い、全員参加のディスカッションではまち・コミの将来についての率直なご意見をいただきました。今回の月刊まち・コミでは、ディスカッションの内容をご報告します。

参加者(五十音順・敬称略): 今田忠(市民社会研究所/まち・コミ運営委員)、邱明民(神戸大学大学院博士課程/まち・コミ台湾関係)、末正盛隆(まち・コミ地域福祉事業関係)、菅磨志保(大阪大学コミュニケーションデザイン・センター/まち・コミ研究アドバイザー)、田中貢(都市再生機構/まち・コミ運営委員)、田中保三(株式会社兵庫商会/まち・コミ顧問)、戸田真由美(まち・コミ事務局スタッフ)、野崎隆一(株式会社遊空間工房/まち・コミ運営委員)、宮定章(まち・コミ代表)

司会進行: 東末真紀(NPO法人神戸まちづくり研究所)



集いの参加者たちは、今のまち・コミに対して、どういことを気にしているんだろう。

今田 まち・コミは、組織運営的なことは向いていないように感じる。常駐者二人(宮定、戸田)という今の規模であれば、その時々課題に合わせて対応する、というやり方でいいと思う。ただし、賛

助会費や助成金をいただいているわけで、報告はきちんとしなければならない。長期的に見ると、組織としてどういことをやっていくか、ミッションは何で、そのためにどうい体制を整えるのか、御蔵地区の状況が変化する中で、どういことをやるのか、決める必要があるだろう。

田中貢 自活できる構造に向けて、どの時点でいかに飛び出すか。組織は個人の集合体であって、こ

の組織で食べていけるのかということ、見据えた行動をしなければならない。無期限で夢を追っていくというのでは、長続きしない。軸足をまち・コミに置きながらも、他方では違うことを考えるという、期日を決めた複眼的な行動が大事ではないか。

田中保 この地域がどうやって自立していくか、楽しく住み良いまちにするにはどうすればいいか、というところを模索しながら、今までやってきた。今がちょうど潮の変わり目。震災復興の中で、心がついて行けていない人がいる。人の意識が自立に変わっていくのは大変な作業だが、必要で、行動しながら変えていかないといけない。まちの自立には強烈なリーダーシップが必要。まち・コミならリーダーになりうると思う。また、地元の資源を加工し付加価値を高めていく、ネットワークを作り出すということがこれから必要だろう。

邱 自分の城を築いていない、という気がする。なんのためにやってきたのか議論とその上での発信が必要。何でもやっていると、何にもやっていないように思われるのではないか。台湾での私の経験では、コミュニティ組織の衝突や矛盾はいくらでもある。集団というものの歴史を考えると、少しは政治的意味合いも見えてくる。深くこだわる必要はないのでは。まち・コミは、自分たちがやりたい、あるいはこうあるべきと考えたことをやってきて、独自のシステムができあがっている。これは社会システムとは違うので、理解されるのは難しい。これまでやってきた内容を発信し、今の住民との関係では難しいかもしれないが、伝えなければならない。外部評価は高いが、外部の人の意見。それが内部にどういう影響を与えるのかも、考えなければならないポイントだろう。



12年間の活動を振り返って、まち・コミはどういうことをやってきたんだろう。

東末 まち・コミではさまざまな取り組みを行ってきたが、仕掛けとして意識したのが、「イベントを

通じてニーズを見る」「つながりを取り戻すための機会を持つ」「多くの人に来てもらい外部の人に伝えると共に、内部にも情報発信」を行ってきた。また、「自分たちで出来ることは自分たちでやる」ということをやってきた。関わることで、地域の良さを見だし、地域づくりに関わりたいという意識を向上させることに相当なパワーを使ってきたんだと感じる。まちの復興過程で、素人が無心にならばよかった。その中で、地域を支えたり、逆にまち・コミが支えられたり、といった関係にもなってきたのだろう。12年間やってきて、今の悩みは、地域住民が自分たちでまちをつくるという「地域の自立」と、「まち・コミの経営面での自立」のバランスが取りにくいこと。また、地域の現状や将来に目を向けている住民の中にも、その時々課題について、理解し、納得し、共感し、行動する人がいる一方で、まち・コミの動きに付いて何となく行動する人もいるということだ。



まち・コミの現状をどう捉えればいいのかだろう。

邱 地域では今対立が起こっている。かなり複雑な状況だ。単に、今までの活動にどれだけ関わったか、自分で考えて行動しているか、まち・コミのやり方について行けているかどうか、という簡単なものではない。また、住民と住民の間でも、いろいろな問題があるはず。まち・コミでは、理解、接触ができないこともあるだろう。

野崎 現状認識として、まち・コミの位置を考えたい。例は良くないが、被災地の復興まちづくりを病院に例えると、行政は医師、住民は患者、コンサルタントは医者のカルテを尊重しながら患者の立場も考える看護師といえるだろう。ではまち・コミは何かというと、付添婦ではないか。住民に寄り添って、説明したり、住民の意見を引き出すようなところがある。いろんな局面で住民に同化して物事を考えることが根っこにある。同化するからケンカもあ

る。看護師と患者であれば、お互いに立場がわかるからケンカはしない。また、震災後の危機を脱した中で、いつまでも付添婦がいるのでは、反発が起こるといっても心理的にあるような気がする。そして、いつまでも傍に居てくれると、まち・コミの存在意義は何だろうという疑問がわいてくるのではないか。

今田 今の御蔵は、野崎さんの例に合わせると、もう治ったのだから放っておいてくれ、という状況。では、まち・コミは、これから先何をやるのか。御蔵にこだわり続けるという点では、地域住民のニーズを問直し、何を求められているのかを知らないといけない。また、次世代のリーダーも地域の中に3人くらい必要だろう。御蔵外に向けては、まち・コミが今までやって来たことを普遍化して、他地域に誘致発信し、事業を受注できるようにしたほうがいいのでは。

野崎 まち・コミには、アマチュアとしてのピュアさがあり、そこに惹かれる。極端に言うと原理主義者のようなところがあり、頑固に自分たちのやりたいことをやってきたのかなと感じる。サポーター側もそれを理解し共感してはいるが、ある面では専門性を持った組織として信頼もしている。これから先、あくまでもアマチュアリズムを貫くのか、少し軌道修正して組織基盤を固めるのか。路線を決めてくれないと、回りの人たちもどう応援していいかわからないだろう。

末正 まち・コミは外部にも支援に行っているが、現実には御蔵に根ざさないといけないのではないか。



12年目を迎えたまち・コミはこれから先、どんなことを期待されているのだろう。

邱 今までの経験を整理し、本にまとめて出版して欲しい。そして、多くの地域やコミュニティに対して、これまでの経験を生かした活動をしてほしい。また、法人化して、一般社会のシステムに添わなければならないだろう。そのうち、世間から相手にされなくなる。

末正 立ち位置、スタンスをはっきりして欲しい。介添型なのか、取り仕切り型(引率型)なのか。御蔵では紛争が起こったわけだが、そういう風土の所でやり方というのがあるだろう。土地や住民のせいにして嘆いても仕方がない。御蔵でどうがんばるかを考えてほしい。

今田 もしスタッフが増えれば、コミュニティビジネス的な展開も視野に入れるのもいいのでは。今までやってきたアマチュアリズムのまちづくりは大きく転換するが、そうしなければ経済的に安定しないので、組織継続ができないだろう。

田中貢 まずは、金銭面での自立を。自活と自立があって、自律につながる。自立できれば、自分で方向性を変えていくこともできるだろう。

菅 今はひとまず、休息と充電が必要では。そして、御蔵にいる根拠を示すことが必要だろう。また、今までの住民一体型ではなく、プロ化など次の展開を考えていく必要がある。

野崎 まち・コミのあり方は母性。ここらで子離れの旅立ちをしなければ。また、これまでの活動資源の整理と確認をやる必要がある。まち・コミのような寄り添い型の復興支援をやっているグループは少なく、まち・コミという組織の希少価値は、そこにある。まち・コミを応援する人は、そのありかたに対して共感し応援してくれた。記録としてまとめる責任があり、応援してくれた人へのお礼にもなるだろう。また、古民家移築や出石支援が、御蔵のまちづくりとどうつながっているのか、伝えられているのかどうかも気になるところ。

今田 まちづくりを掲げるのであれば、徹底的にプロ化するとか、何か売れるものをしなければ、今のままでは今ぐらいのことしかできないのでは。プロなら普遍的にどこでも仕事ができる力をつける。御蔵にこだわるなら、御蔵でできるビジネスをする必要があるだろう。

野崎 プロでも一つの地域で食べることはできない。

邱 位置づけを考える際には、やるべきことはちゃんとできるようなものにしてほしい。また、何

かが決まらなると応援がしにくい。お互いにできることは限られているので、その接点が見つかれば、前に進むだろう。宮定さん、田中さん、戸田さん(事務局)で、まち・コミの価値、ポジションなどを時間をかけてゆっくり考え、我々に発信し、応援してくださいという風になればいい。

田中貢 応援する側も、気持ちはあっても社会に対する発言力がなければできないことがある。いつまでも待てるというわけではない。

菅 まち・コミの活動に多くの住民が関わっている。共有した活動体験がどういう風に残っているのかが気になる。また、もう少し長期的に、宮定さんが何をやりたいと思っているのか。宮定さんの専門は建築であり、納得いくコミュニケーションが重要という話も、それ自体が最終目標ではなく、将来の「納得のいく建物をつくる」という目標に向っているのでは。

邸 住民にもいろんな立場があり、活動の意義がわかったとしても、態度で納得を示すことができない人がいる。

末正 コミュニケーションは非常にむずかしい。100人に対する満足なんてあり得ない。マイナス思考ではなく、10人、20人、30人と満足する人を少しずつ増やしていく。その人たちが「有志」ではないか。

今田 「まちづくり」というのが漠然としすぎているから、事業のプログラムの作り方など、実践的なことの方がむしろ大事では。事業を組み立てることによって住民の協力も得られるし、外部のボランティアも呼び込める。



当日の会場の様子

集いを終えて、代表の宮定から

今回は、震災13年を迎え、復興まちづくりの現場は、震災・復興まちづくりとは何かを考えざるをえない時期になり、この度このような集いを持たせて頂きました。多くのご意見をいただき、感謝しています。また、当日の参加者のほか、前代表の小野さんや専修大学の矢根教授(まち・コミ運営委員)からも、「今までの活動を振り返り背骨をしっかりとっていくこと」「今までの活動を可視化し、共有していくことが必要。これからは、説得するようなコミュニケーションではなく、相手の話を聞き納得のコミュニケーションにして行った方が良い」等、ご意見をいただきました。

復興まちづくりだけでなく、御蔵住民や応援団の志やまちづくりを感じるために集まっています。御蔵での活動を継続し、老若男女問わず、幅広く人に集っていただき、活気ある地域を目指していきたいと思っています。復興の中から見える経験を問うことで、都市の脆弱性から、自立する復元・回復力を養うことに取り組み、サステナブルな社会を目指すため、地域の中で生活・まちづくりを感じられる支え合いの場を作っていければと思っています。

まずは、少しでも活動趣旨を感じて頂くため、まち・コミの経緯から強み、弱みを見直し、まち・コミの目的は何か、背骨は何かを振り返り、共有するために、まずは記録作りに取り組みでいきます。ご協力していただける方はよろしくお願ひします。

現場にいて苦境に立つと、いつの間にか事実だけでなく、固定観念が生まれてきてしまいます。その上で、月刊まち・コミ読者応援団の皆様からのご意見が非常に役に立ちます。是非神戸へお越しの際は是非お立ち寄り下さい。よろしければご意見よろしくお願ひします。



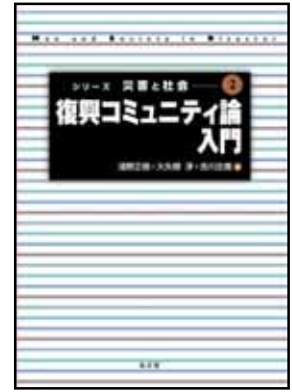
まち・コミおすすめBOOK

シリーズ 災害と社会

『復興コミュニティ論入門』

編：浦野正樹、大矢根淳、吉川忠寛

出版社：弘文堂 定価：本体2,600+税



地震、火山の噴火、台風、テロ、原発事故など、様々な被害や災害に向かい合う研究として注目されている「災害社会学」。人々の暮らしに密接な研究が、一般の人にも手にしやすい形でまとめられた「シリーズ 災害と社会」の刊行が始まりました。最新の研究成果や、国内外問わずあらゆる現場の状況が報告されています。

第2巻の『復興コミュニティ論入門』では、被災した地域の被災生活、生活再建、コミュニティ復興などについての概論と具体的事例が多く紹介されています。御蔵の事例も、これまでの復興まちづくりの経過に加え、古民家移築集会所、修学旅行生への震災体験学習、地域カルタづくりといった事業についてのコラムを掲載しています。

まち・コミの運営委員である、早稲田大学文学部 浦野正樹教授、専修大学文学部 大矢根淳教授が編集執筆に携わり、まち・コミの関係者も執筆陣に名を連ねています。

目次、執筆者等くわしくは、 <http://www.koubundou.co.jp/books/pages/50102.html>

大地のつぶやき

（出石鳥居やすらぎ市民農園雑感 Ⅱ）

夏に花が咲いた黒豆。畑の溝を掘って畝を高くし、雑草も鎌でかじき取った。盆前には日照りが続いたため、夜十時頃から朝九時頃まで夜通し、宮定君と交代での水遣りを週二回、三週連続して励んだ。手間を掛けた分だけ良く実ったものと思われる。ルソーは「自然は決して私たちをだまさない。私たちは自分で自分をだましていくのだ」（エミール）と、蓋し名言だ。いいものを作って喜んで頂きたいの一念で徹夜した。

前回黒豆の枝豆に期待して欲しいと書いた所、沢山のご予約をいただき、感謝の気持ちでいっぱいだ。お陰様で応援して頂いた皆様の評判も良く、胸を撫で下ろした。収支のバランスもまだ水面下だが、もう少しの所に来ている。

冬野菜も順調だが、これも収穫時に二週連続雨に見舞われ、とても寒く、作業が大変だった。大根や蕪、人参、ほうれん草や水菜、レタスを洗い、水切りする。外気は冷たく、途中で放り出したくなる。「人生冷に耐え、苦に耐え、労に耐え、困に耐え」（曾國藩）を忘れたか、これしきで負けてたまるかと気を取り直す。

会社からのお歳暮として、野菜を送った先がある。二、三日後に電話やお手紙を頂戴する。この喜びの声を聞くと、あの困苦が楽しかったことに変わるから不思議だ。

種を蒔いて収穫まで、根気よく待つ心が今失われている。効率万能に心が蹂躪され、農業全般までそれで押し量れる筈がない。批判することに熱中して、温かい心のこもった言葉を忘れていっているのではないか。ほんの少し関わっただけだが「農」は人の全人格を養う力が自然と相俟ってそこにある様な気がしてならない。古民家移築もそうだった。農山村の美しい風景は、古代人から現在に至る迄、営々として引き継がれてきたもの故、我々の心を癒す力があって然るべきだろう。十二月初旬に玉ネギの苗を一万本、出石の奥様方の協力を得て植えた。冬野菜と共に乞うご期待！

株式会社兵庫商会 田中保三

まち・コミ活動報告

9/1 ~ 10/31

- | | | |
|----------------------------|------------------------------|---------------------------------|
| 9/1 研修受入(名古屋) | 9/29 月刊まちコミ印刷・発送作業 | |
| 9/4 出張講演(武豊町・田中) | 9/30 月刊まちコミ発送作業 | |
| 9/7 サポーター打ち合わせ | 10/3 視察受入(アメリカから) | 10/22 出石市民農園収穫祭参加 |
| 9/11 研修受入(京大防災研) | 10/9 サポーター打ち合わせ | 10/23 修学旅行受入研修会 |
| 9/18 アドバイザー派遣
(東末真紀氏来訪) | 10/9 視察受入(大阪府) | 10/28 研修受入(大真空) |
| 9/28 研修受入(津幡町) | 10/15 まち・コミ運営委員会(神戸) | 10/30 研修受入
(JICA 日本NPO センター) |
| 9/28 アドバイザー派遣 | 10/18 アドバイザー派遣 | 10/30 修学旅行受入
(滑川総合高等学校) |
| 9/29 研修受入
(まちづくり支援機構) | 10/19 修学旅行受入(早蘇中学校) | |
| | 10/20 研修受入
(山鹿市民生児童委員協議会) | |

ご支援、ありがとうございます。

9/1 ~ 10/31

賛助会員(新規・継続)

渡戸一郎(東京都) 田中礼治(宮城県) 高宮城幸雄(兵庫県) 辻久臣(兵庫県) まつしまハル(熊本県)
 高井秀樹(兵庫県) 芦沢吉朗(青森県)

協力

社団法人シャンティ国際ボランティア会(東京都) 株式会社兵庫商会(兵庫県) 【順不同・敬称略】

新規賛助会員募集&更新のお願い

まち・コミでは、さらに活発に活動を行うため、賛助会員を募集し、金銭面でのご支援をいただいております。会費は、事業推進のために活用させていただきます。賛助会員のみなさまには、会員特典をご用意しておりますので、ぜひ賛助会員への登録をお願いいたします。

また、賛助会員は1年更新とさせていただきます。現在賛助会員の方も時期がきましたら、更新をお願いいたします。(期限は「月刊まち・コミ」郵送時の封筒の、宛名の下に記載していますので、ご確認ください。)

会員特典

本誌「月刊まち・コミ」の送付。

まち・コミュニケーションに関する、Eメールでの情報送付、WEBの特別ページの参照

よろしくおねがいいたします。

編集後記 今年もあっという間。あれこれ、やり残したことが浮かびます(汗) 来年はステップアップの年にしたいと、図書館でいっぱい本を借りましたが・・・(戸)

年会費

個人・法人 年間5000円
 学生 年間3000円

郵便振替口座番号

00950-3-42788

口座名称

「まち・コミュニケーション事務局」

2007年11月1日発行

編集/発行 まち・コミュニケーション

定価 100円

御蔵事務所 〒653-0014

神戸市長田区御蔵通5-5

TEL 078-578-1100 / FAX 078-576-7961

東京事務所 〒162-0052

東京都新宿区戸山1-24-1

早稲田大学文学部浦野研究室内

神奈川事務所 〒214-8580

神奈川県川崎市多摩区東三田2丁目1-1

専修大学文学部大矢根研究室内

e-mail m-comi@bj.wakwak.com

URL http://park15.wakwak.com/~m-comi/